

## 楕円の相関係数（その 5）

nino

2017 年 7 月 20 日

（その 2）では、左 45 度回転の楕円の相関係数についてベクトルと三角関数の合成公式を用いて考察しました。ここでは、任意の回転角  $\alpha$  の楕円について同様に検討します。

### 回転楕円の相関係数のベクトル表示

（その 4）の結果から、回転角  $\alpha$  の楕円（長軸： $a$ 、短軸： $b$ ）の相関係数は、

$$\begin{aligned} R_{XY} &= \frac{(a^2 - b^2) \cos \alpha \sin \alpha}{\sqrt{(a^2 \cos^2 \alpha + b^2 \sin^2 \alpha)(a^2 \sin^2 \alpha + b^2 \cos^2 \alpha)}} \\ &= \frac{(a \cos \alpha)(a \sin \alpha) + (b \sin \alpha)(-b \cos \alpha)}{\sqrt{\{(a \cos \alpha)^2 + (b \sin \alpha)^2\} \{(a \sin \alpha)^2 + (-b \cos \alpha)^2\}}} \end{aligned}$$

と書き換えることができます。この式において、分子はベクトル  $\mathbf{P}(a \cos \alpha, b \sin \alpha)$  とベクトル  $\mathbf{Q}(a \sin \alpha, -b \cos \alpha)$  の内積、分母はそれぞれのベクトルの長さの積とみなせます。

余弦定理によれば、ベクトル  $\mathbf{P}$  と  $\mathbf{Q}$  および  $\mathbf{PQ}\{a(\sin \alpha - \cos \alpha), -b(\cos \alpha + \sin \alpha)\}$  の長さをそれぞれ  $|\mathbf{P}|$ 、 $|\mathbf{Q}|$ 、 $|\mathbf{PQ}|$  とすると、 $\angle \mathbf{PQ}$  ( $= \gamma$ ) のコサインは次式で表されます。

$$\cos \gamma = \frac{|\mathbf{P}|^2 + |\mathbf{Q}|^2 - |\mathbf{PQ}|^2}{2|\mathbf{P}| |\mathbf{Q}|}$$

各ベクトルの長さは、

$$\begin{aligned} |\mathbf{P}| &= \sqrt{(a \cos \alpha)^2 + (b \sin \alpha)^2} \\ |\mathbf{Q}| &= \sqrt{(a \sin \alpha)^2 + (-b \cos \alpha)^2} \\ |\mathbf{PQ}| &= \sqrt{a^2 (\sin \alpha - \cos \alpha)^2 + (-b)^2 (\cos \alpha + \sin \alpha)^2} \end{aligned}$$

ですから、これらを余弦定理の式に代入すると

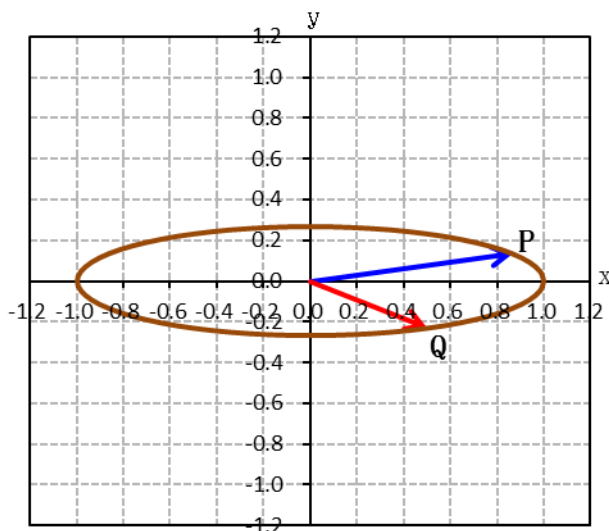
$$\begin{aligned} \cos \gamma &= \frac{(a \cos \alpha)^2 + (b \sin \alpha)^2 + (a \sin \alpha)^2 + (-b \cos \alpha)^2 - \{a^2 (\sin \alpha - \cos \alpha)^2 + (-b)^2 (\cos \alpha + \sin \alpha)^2\}}{2\sqrt{(a \cos \alpha)^2 + (b \sin \alpha)^2} \sqrt{(a \sin \alpha)^2 + (-b \cos \alpha)^2}} \\ &= \frac{a^2 \cos^2 \alpha + b^2 \sin^2 \alpha + a^2 \sin^2 \alpha + b^2 \cos^2 \alpha}{2\sqrt{(a \cos \alpha)^2 + (b \sin \alpha)^2} \sqrt{(a \sin \alpha)^2 + (b \cos \alpha)^2}} \\ &\quad - \frac{\{a^2 \sin^2 \alpha - 2a^2 \cos \alpha \sin \alpha + a^2 \cos^2 \alpha + b^2 \cos^2 \alpha + 2b^2 \cos \alpha \sin \alpha + b^2 \sin^2 \alpha\}}{2\sqrt{(a \cos \alpha)^2 + (b \sin \alpha)^2} \sqrt{(a \sin \alpha)^2 + (b \cos \alpha)^2}} \\ &= \frac{(a^2 - b^2) \cos \alpha \sin \alpha}{\sqrt{(a^2 \cos^2 \alpha + b^2 \sin^2 \alpha)} \sqrt{(a^2 \sin^2 \alpha + b^2 \cos^2 \alpha)}} = R_{XY} \end{aligned}$$

となり，(その1)の共分散等により求めた回転角  $\alpha$  の楕円の相関係数  $R_{XY}$  と一致します．  
 また， $\angle POQ(\gamma)$  を  $x$  軸を境として  $\angle POx(\gamma_P)$  と  $\angle xOQ(\gamma_Q)$  の2つに分けた場合は，次式が成立します．

$$\cos\gamma_P = \frac{a\cos\alpha}{|P|}, \quad \sin\gamma_P = \frac{b\sin\alpha}{|P|}$$

$$\cos\gamma_Q = \frac{a\sin\alpha}{|Q|}, \quad \sin\gamma_Q = \frac{b\cos\alpha}{|Q|}$$

下図は， $a=1, b=0.268$  の楕円曲線と，回転角  $\alpha=30$  度の場合におけるベクトル  $P(0.866, 0.134)$  と  $Q(0.500, -0.232)$  を書き加えたものです．



各ベクトルの長さや角度を計算すると， $|P|=0.876$ ， $|Q|=0.551$ ， $|PQ|=0.518$ ， $\angle POQ=33.69^\circ$  ( $\angle POx=8.79^\circ$ ， $\angle xOQ=24.90^\circ$ ) が得られました．

### 三角関数の合成公式を用いた回転角 $\alpha$ 度の楕円の相関係数の導出

三角関数の合成公式を用いて回転角  $\alpha$  度の楕円  $(X, Y)$  の相関係数の導出を行います．  
 三角関数の合成公式は，振幅を  $H_x, H_y$ ，位相を  $\phi_x, \phi_y$  とすると，

$$X = a\cos\alpha\cos\theta - b\sin\alpha\sin\theta$$

$$= H_x \cos(\theta + \phi_x)$$

$$Y = a\sin\alpha\cos\theta + b\cos\alpha\sin\theta$$

$$= H_y \cos(\theta - \phi_y)$$

で表されます．ここで，振幅と位相は以下の通りです．

$$H_x = \sqrt{a^2 \cos^2 \alpha + b^2 \sin^2 \alpha} \quad \cos\phi_x = \frac{a\cos\alpha}{H_x}, \quad \sin\phi_x = \frac{b\sin\alpha}{H_x}$$

$$H_y = \sqrt{a^2 \sin^2 \alpha + b^2 \cos^2 \alpha} \quad \cos\phi_y = \frac{a\sin\alpha}{H_y}, \quad \sin\phi_y = \frac{b\cos\alpha}{H_y}$$

一方、回転角  $\alpha$  度の楕円 ( $X, Y$ ) は、三角関数の合成公式の記号をそのまま用いると、 $x = a \cos\theta, y = b \sin\theta$  ですから、次のように表すことができます。

$$\begin{aligned} X &= x \cos\alpha - y \sin\alpha \\ &= a \cos\alpha \cos\theta - b \sin\alpha \sin\theta \\ &= H_x \cos(\theta + \phi_x) \\ Y &= x \sin\alpha + y \cos\alpha \\ &= a \sin\alpha \cos\theta + b \cos\alpha \sin\theta \\ &= H_y \cos(\theta - \phi_y) \end{aligned}$$

この式は、三角関数の合成公式そのものです。

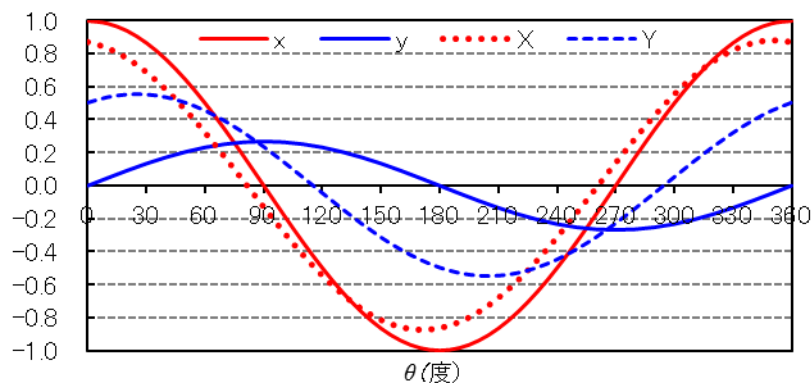
三角関数とベクトルの各数式を比べてみると、振幅と位相はそれぞれベクトルの長さや角度に一致しており、 $|\mathbf{P}| = H_x, |\mathbf{Q}| = H_y, \angle P0x = \phi_x, \angle x0Q = \phi_y$  が成立しています。

次に、位相差のコサインを計算すると、

$$\begin{aligned} \cos(\phi_x - (-\phi_y)) &= \cos\phi_x \cos\phi_y - \sin\phi_x \sin\phi_y \\ &= \frac{a^2 \cos\alpha \sin\alpha}{H_x H_y} - \frac{b^2 \sin\alpha \cos\alpha}{H_x H_y} \\ &= \frac{(a^2 - b^2) \cos\alpha \sin\alpha}{\sqrt{(a^2 \cos^2\alpha + b^2 \sin^2\alpha)(a^2 \sin^2\alpha + b^2 \cos^2\alpha)}} \\ &= R_{xy} \end{aligned}$$

となり、相関係数と一致しました。

下図は、 $a=1, b=0.268$  および  $\alpha=30$  度の場合における各変数の変化図です。



変数  $X, Y$  の振幅と位相はそれぞれ  $H_x=0.876, H_y=0.551, \phi_x=8.79^\circ, \phi_y=24.90^\circ$  , また、位相差は  $\phi_x + \phi_y=33.69^\circ$  となり、振幅と位相の値は各々ベクトルの長さや角度の値と一致しています。

## 2つのベクトルの長さや角度がそれぞれ等しい時の回転角 $\alpha$

(その2)の結果によると、45度回転の楕円の場合は、2変数間におけるベクトルの長さや三角関数の振幅がそれぞれ等しく、また、ベクトルの角度や三角関数の位相もそれぞれ等しくなりました。さらに、(その4)では、45度回転の楕円の場合は2変数の標準偏差が等しくなることがわかりました。そこで、2変数が等しい時の  $\alpha$  値を求めるため、ベクトルを例に検討してみます。

まず、2つのベクトルの長さが等しい時の  $\alpha$  値を求めてみます。

$$\begin{aligned} |P| &= |Q| \\ \sqrt{(a \cos \alpha)^2 + (b \sin \alpha)^2} &= \sqrt{(a \sin \alpha)^2 + (-b \cos \alpha)^2} \\ a^2 \cos^2 \alpha + b^2 \sin^2 \alpha &= a^2 \sin^2 \alpha + b^2 \cos^2 \alpha \\ (a^2 - b^2)(\cos^2 \alpha - \sin^2 \alpha) &= 0 \\ (a^2 - b^2) \cos 2\alpha &= 0 \end{aligned}$$

したがって、 $\cos 2\alpha = 0$  の時、2つのベクトルの長さが等しくなります。三角関数の振幅についても同じ結果が得られます。さらに、標準偏差については、数式に定数がかかりますが、やはり同じ結果となります。

次に、2つの角度が等しい時の  $\alpha$  値を求めてみます。

$$\begin{aligned} \cos \gamma_P &= \cos \gamma_Q \\ \frac{a \cos \alpha}{|P|} &= \frac{a \sin \alpha}{|Q|} \\ a \cos \alpha \sqrt{(a \sin \alpha)^2 + (-b \cos \alpha)^2} &= a \sin \alpha \sqrt{(a \cos \alpha)^2 + (b \sin \alpha)^2} \\ a^2 \cos^2 \alpha (a^2 \sin^2 \alpha + b^2 \cos^2 \alpha) - a^2 \sin^2 \alpha (a^2 \cos^2 \alpha + b^2 \sin^2 \alpha) &= 0 \\ a^2 b^2 \{(\cos^2 \alpha)^2 - (\sin^2 \alpha)^2\} &= 0 \\ a^2 b^2 (\cos^2 \alpha + \sin^2 \alpha)(\cos^2 \alpha - \sin^2 \alpha) &= 0 \\ a^2 b^2 \cos 2\alpha &= 0 \end{aligned}$$

この場合も、 $\cos 2\alpha = 0$  の時に、2つのベクトルの角度が等しくなっています。三角関数の位相についても同じ結果が得られます。

このように、 $\cos 2\alpha = 0$  の場合はベクトルや三角関数の2変数における長さや振幅および角度や位相がそれぞれ等しくなり、相互に完全に対応しています。また、長さや振幅に関しては、2変数の標準偏差が等しくなることと密接に関連していることが示唆されます。